国立研究開発法人国立がん研究センター理事会（令和元年度第９回）議事概要

日　時：令和元年１２月１９日（木）１６：００～１７：３０
場　所：国立がん研究センター　管理棟　第１会議室
出席者：中釜斉理事長、南砂理事、松本洋一郎理事、間野博行理事、小野高史監事、増田正志監事
欠席者：児玉安司理事、北川雄光理事

Ⅰ．前回（令和元年度第８回）議事録の確認
・前回議事録について了承。
・前回議事録署名人を間野理事と増田監事に依頼。

Ⅱ．審議事項
1.　6カ年計画と中長期キャッシュフローについて
資料に沿って報告された。
【主な意見等】
・当センターでは多額の建替え財源が必要となる中央病院・東病院の建替えのタイミングでセンターがどれだけ資金をプールしなければならないのか資金運用をかなり長期に渡って考えることが必要。

2.　NCCにおける国際戦略機能のあり方と部新設の提案について
資料に沿って報告された。

3.　令和元年度決算見込み等について
資料に沿って報告された。
・皆でがんばったためこの部分が改善したということを現場の方と共有できるようなシステムを構築していくことが重要なのではないか。
・当センターの場合、研究開発法人ということもあり給与という報酬と同時に、新しいものを開発したいというモチベーションを実際実現できる体制を整えることが大きなモチベーションになってくるのではないかと思う。
・研究でのモチベーションが上がることで学会などでのアカデミックなステータスが上がるというモチベーションはあると思う。単に賞与だけでなく、名誉であるかも重要であると考える。
・少なくとも医師に関しては、例えば最新の機器を使用して診療ができるといったモチベーションが圧倒的に多い。給与以外にも機器であったり、新しい医療ができるというモ

チベーションも重要であると考える。

・研究所では。業績を上げた方については、できるだけ公平に対外的に見ても評価されるように努力をしている。

・外部資金も多く獲得している中で、その成果として若い方が海外で学会に参加し、発表することで評価され、モチベーションにつながっているのではないかと考える。このような状況をセンター全体で見える形にすることは、非常に意味のあることではないかと思う。

・海外での発表や共同研究を地道に行っていかないといけない。様々な観点で若手を育てていただければと思う。

・日本の企業もグローバル化しており、ハイレベルな中国の方と接することが多くなっている。現在の薬の開発は最初からグローバルな開発なため、病院全体で積極的に参加する方針を採っている。以前と比べると、圧倒的に若手が国際的に活躍する場が増えている。なるべくこのような場をセットできるようにしていきたい。

Ⅲ. 報告事項

1.　国立がん研究センターと医薬品医療機器総合機構との包括的連携協定について

資料に沿って報告された。

【主な意見等】

・派遣から戻った人の意見をセンターとしてくみ上げているのか。何が有用か等経験者やPMDAからの声を反映させるとともに、先方にもセンターの意見を伝えることで、より有用な提携を結べるのではないか。

2.　取材対応方針について

資料に沿って報告された。

【主な意見等】

・研究所やセンターの一部を使ったシンポジウムを開くときに、問題ないか見定めることも重要であると考える。

・リスクがあることを認識して、慎重に行っていただければと思う。

3.　政府の会議の状況

資料に沿って報告された。

【主な意見等】

・全ゲノム解析の今後の進め方について、大きく意見が分かれる部分はあるのか。

・大きな意見の相違はないと思う。調査を行えば発がん原因が明らかになり、研究が進むだろうという点について認識は同じだと思う。

・健康・医療戦略参与会合について医療戦略の基本方針や具体的施策はセンターにとって

どのような影響があるのか。

・基本方針が重要な部分となる。世界最高水準の医療の提供に資する医療分野の研究開発の推進に係る基本方針と、健康長寿社会の形成に資する新産業創出、及び国際展開の促進等に係る基本方針の中には新たなヘルスケアビジネスも含まれてくる。予防、進行抑制、共生社会が長寿の達成に重要になっていると考える。当センターに置き換えて考えた場合に、がんの予防、診断・治療、フォローアップ、共生社会、サバイバーシップががんの領域でも非常に重要になってくると考える。世界最高水準の医療の提供に関しては、当センターで行っている研究は世界最高水準の治療や診断に大きく資する分野であると考える。

4. 広報実績等

資料に沿って報告された。

5. 投資委員会報告

資料に沿って報告された。